匂いで充満していて噎せ返りそうになる。
無意識か意識的にか閉じかける足を押し開いてクロッチ部分に目を凝らすと、まるでおもらしでもしたかのような大きな濡れシミが視界に飛び込んできた。
予想以上の濡れ具合に、思わずゴクリと唾を飲み込む。
「ああッ！」
人差し指を伸ばして触れてみると、ディーノの声に混じってぴちゃっという音が聞こえた。
指をもう一本増やし、人差し指と中指を揉み込むように動かすと、ぬちゅぬちゅと粘着質な音がスカートの中に響く。
「すげぇいやらしい音、してる」
「やぁ……音立てんなっ……はぁあッ！」
上下に擦るだけではなく、掻き回す様に指で大きくぐるぐると円を描くと、よりぬめりを帯びたイヤラシイ音が辺りに響き、それに合わせてディーノの腰がもどかしそうに揺れた。
「こんなに濡れるんじゃ、二枚重ねにしてても染みちまって、人前で脱いだらヤバかったんじゃねぇか？」
「濡れてる……のは……ロマに、触られてる……から、だもん……」
「でも、もう一枚の方はオレが触る前から脱いでたのにちょびっと濡れてるぜ？」
「んんぅ……も、ロマの……意地悪ぅ……」
「アンタがあんまり可愛いから、つい意地悪したくなっちまうんだよ」
「ひゃっ!? あ……やぁぁん!!」
指を離すと、代わりに少し首を伸ばして下着のウエスト部分に噛み付き、手を使わずにそのままズルッと引き下ろす。
すると、露になった割れ目から透明な蜜がつぅっと糸を引いて、眼前に細い光の橋を架けた。
蜜の粘度は高く、すぐには切れずにクロッチ部分とディーノを繋いでいる。
舌を出してそれを絡め取ると、蜜の源泉からクリトリスに向かって一息に舐め上げた。
「はぅ……ああァァッ!!」
意識が分散してしまわないように両手は腿に軽く触れる程度に留め、舌に力を込めて割れ目をなぞるように舐め上げる。